

海の軸と海の道

文——伊東孝 Takashi Itoh ●日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授 写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ●土木写真家

宗像・沖ノ島は、神話の世界である。宗像大社が祀っている田心姫神・湍津姫神・市杵島姫神の三女神は、母である天照大御神から、「玄界灘に降り立ち、周辺海域の守護神となつて天皇の統治を助けるように」といわれた（『日本書紀』）。三女神のおわすところが、それぞれ沖ノ島、大島（筑前大島）、宗像本土の田島である。沖ノ島には田心姫神を祀る沖津宮が、大島

には湍津姫神を祀る中津宮が、田島には市杵島姫神を祀る辺津宮が鎮座し、この三宮を総称して宗像大社という。「宗像大社」というひとつの場所があるのではなく、「宗像大社」は三宮のグループ名ということになる。

三宮の位置関係も興味深い。沖ノ島は玄界灘の真ただ中にあり、陸地から六〇キロも離れている。六〇キロという距離は、東京・横浜駅

間の倍であり、東京駅から栃木県にも達する距離である。大島は陸地から一一キロである。しかも三宮の場所是一直線上に並んでいる。実態的には、沖ノ島と大島の延長上の田島に辺津宮を設けたにちがいない。軸線を通すことは、寺院や宮殿の配置、古代の都市計画などでもおこなわれたが、宗像大社の場合は離島と本土との間でおこなわれ、しかも六〇キロものイメージ上の海の軸を通したことになる。なんとも雄大でダイナミックな神社の配置計画である。

さらに興味深いのは、三女神の姉妹関係と配置関係、そして役割である。長女の田心姫神が、一番遠くて条件の厳しい沖ノ島に配置され、海上に発生する霧を象徴し、次女の湍津姫神は、中間に位置する大島が選ばれて、激しい潮流を象徴している。末女の市杵島姫神は、一番年下のゆえか、条件のいい本土の田島に位置して、神を祀る行為の象徴となる。長女と次女は、玄

界灘の特徴をあらわし、末女は自然の脅威を敬うことを意味している。人びとの敬意の念がなくなつて、神を祀らなくなつたとき、自然が猛威をふるうことを暗示している。人間の能力を超越し、自然や島々をも創造できる神々なのに、人間臭さが感じられるのも興味深い。

文化遺産オンラインの記述は冷静である。遺産群は、「四世紀から一〇世紀の東アジアにおいて、大陸との交渉に際して航海の安全祈願のための国家的祭祀が行われた沖ノ島と、祭祀に関わった古代有力氏族に関連する考古学的遺跡



たかやみ
辺津宮境内にある高宮祭場

宗像三女神の降臨地と伝えられる。沖ノ島と並び、全国でも数少ない古代祭場で、祈りの原形を今に伝える。

宗像大社辺津宮の神門から拝殿を望む

1557年の火災で、本殿と拝殿が焼失。現在の拝殿は、1590年、筑前領主だった小早川隆景によって再建された。横6間・入3間の切妻妻入り造り、単層柿葺（こけらぶ）き。国の重要文化財。

から」構成されている。顕著な普遍的価値は、『島』に対する日本固有の自然崇拜思想の原初的な形態を残すのみならず、その祭祀行為が現在にも継続している。」ことにある。

図をみてみよう。瀬戸内海の出口である下関から、豊かな文明の大陸の窓口である釜山へいくには、玄界灘のランドマークである沖ノ島をめざし、対馬の北端経由というように、目標物を目で見ながら航海できる。しかし大型の船がなく、自然の天候まかせの風力と人力で航海するとき、陸地沿いに船を走らせていけば気象の急激な変化があってもすぐに避難できるので安全である。海をわたるときは最短ルートに限る。それゆえ下関を出た船は、一直線に沖ノ島をめ



韓国・対馬・玄界灘と宗像三宮の位置関係図

沖ノ島は玄界灘のほぼ中央に位置し、沖ノ島・大島・宗像大社・中津宮が一直線に並ぶ。（『宗像大社』宗像大社社務所より転載）

ざしたのではなく、まずは辺津宮のある田島をめざした。港は「神湊」。ここから中津宮のある大島をめざした。「神湊」という名前も宗像大社に由来する。大島から沖ノ島までは四九キロメートル。下関から一気にくくと八三キロメートル。海上の距離は四割も削減できた。

建国直後の大和朝廷にとって宗像地方を經由する海上ルートの「海北道中」（朝鮮半島に向かう古代海路）は、国家を支える生命線であった。沖ノ島の祭祀は、国家をあげての海上航路の安全祈願であった。しかしそれも、遣唐使派遣の停止とともに終焉を迎える。だが玄界灘航行の精神的な支えとして沖ノ島信仰は、途絶えることなく今日へと継承されている。このような事例は、「世界的に見ても例外的」（文化遺産オンライン）といわれる。これまでの学術調査で、多くの祭祀遺物が出土し、約八万点が国宝に指定された。それゆえ沖ノ島は「海の正倉院」ともよばれる。

沖ノ島の北西海上にあたる対馬海峡の東水道は、近代史の舞台になったところでもある。日露戦争で日本の勝利を決定づけた日本海海戦は、ここでおこなわれた。

宗像市の隣の福津市内には大小五〇〇余りの古墳があるといわれる。このうち玄界灘に面した市北部に広がる標高五〇メートル未満の台地・南北七キロメートル・東西二キロメートルの範囲には、五世紀前半から七世紀前半にかけての古墳が集中して築かれ



新原・奴山古墳群の俯瞰景

左上部溜池を背景にこんもりとした森を形成しているのは、この古墳群の中で最大の22号墳で、全長80mの前方後円墳。円墳の直径は15～30m。右上奥にかすかに見える山影は、中津宮が鎮座する大島。



今回の取材に際し、宗像大社および宗像市のご協力を得ました。記して感謝いたします。

また最後になるが、五カ所の勝手連的な遺産候補をふくめ、「世界遺産をめざす土木・建築の遺産」を一回連載させていただいた。今回で一区切りである。連載にお付き合いただいたみなさまにお礼を申し上げます。

参考文献

・『宗像大社』宗像大社社務所、平成二十三年
・『むなかたさま その歴史と現在（改定版）』
宗像大社、平成十八年

ている。津屋崎古墳群といわれ、六〇基の古墳が現存し、前方後円墳一六基、円墳四三基、方墳一基より構成されている。かつては広い入り海にも面していた。これらの古墳群を築いたのは、沖ノ島祭祀との関わりでも知られる古代豪族「宗像君」一族と考えられている。宗像一族はまたすぐれた航海術をもち、大和朝廷の大陸交渉においても一翼を担っていた。

新原・奴山古墳群は、津屋崎古墳群の中でもっとも密集している古墳群だ。東西約八〇メートルの台地上に、前方後円墳五基、方墳一基、円墳五三基が発見され、このうち四一基が現存し、津屋崎古墳群の三分の二を占める。五世紀前半から六世紀後半にかけてつくられた。現在では土が削られて円墳のようになった前方後円墳や、道路工事で削られた古墳などもある。高台にのぼって、畑の中に浮かび上がる新原・奴山古墳群を一望すると、古代人の空間体験を追体験するようなロマンがある。

樹木で覆われた桜京古墳

古墳の状態は、さまざまである。写真のように墳丘の上に樹木が生えたものもあれば、森林のように覆われたものもある。中には神社の奥の院として再利用されたものもある。



きれいに残る前方後円墳

新原・奴山古墳群の30号墳。全長54m、5世紀中頃～後半に築造された。古墳の中には、国道495号線の工事で、古墳の一部が削りとられたものもある。